

株式会社工ム二

講演資料



会社概要・自己紹介

会社概要



□ 株式会社エムニの概要

所在地	東京都千代田区東神田 1丁目11-5 石田ビル東神田 3階
設立年月日	2023年10月31日
代表者	下野 祐太
HP	https://emuniinc.jp
電話番号	090-9276-6995

□ 株式会社エムニの特徴



京都大学発

&



松尾研発



技術顧問

□ 松尾先生による弊社のご紹介

エムニは、製造業における生成AIの活用に特化したスタートアップです。

代表の下野君は松尾研究所で3年間、製造業向けAI社会実装に深く携わってきた経験を持ち、その豊富な知識と実績が大きな強みとなっています。

また共同創業者の後藤君をはじめとして、有名ITメガベンチャーでのプロジェクト経験を持つメンバーが在籍しており、技術力と創造性に溢れたチームを形成しています。「AIで働く環境を幸せに、世界にワクワクを」というミッションのもと、エムニが製造業に革新をもたらし、未来の産業をリードすることを強く期待しています。



代表取締役 CEO

下野 祐太

SHIMONO YUTA

- 京都大学大学院エネルギー科学研究科卒
- 東京大学松尾研究所にて
プロジェクトマネージャーに従事
- PFN・DeNA・Recruit等の
複数企業のプロジェクトに取り組む
- 松尾研起業クエスト1期生
- 主に、AI開発・Biz面を担当

製造業×生成AI インタビュー

「製造業×生成AI インタビュー」の連載記事一覧です。



いいね! 0 シェアする X ポスト BIブックマーク 0



製造業×生成AI インタビュー：

生産現場が目にする「生成AI×オンプレ」の未来 何が導入障壁になり得るか

現在、生産現場における生成AI活用では、オンプレミス環境下でのAIモデル運用に注目が集まっている。ただ、クラウド経由で生成AIサービスを利用する場合と異なり、オンプレミス環境ではさまざまな制約条件がある。これら乗り越え、どのように実装を進めていくべきか。EM2の下野祐太氏に話を聞いた。

[池谷翼, MONOist] (2024年10月7日)



製造業×生成AI インタビュー：

産業界で使い倒せる日本語LLMを リコーが自前のモデル開発に取り組み始めたワケ

世界中で大規模言語モデル（LLM）の開発成果が次々に発表されている。国内でも日本語対応のLLM開発に取り組む企業が表れているが、その1社がリコーだ。130億パラメーターの日英両言語対応LLMを作った同社に、開発の狙いや今後の戦略を聞いた。

[池谷翼, MONOist] (2024年5月23日)



製造業×生成AI インタビュー：

“超高速”でアイデアを具体化 DNPが「生成AIラボ」で目指す共創活動

生成AIに関心を示し、自社サービスや業務への導入を検討する製造業は多い。だが、生成AIで何かできるのか、どういったサービスを作るのかをイメージし、具体化していく仕組みが社内にあるだろうか。そのための仕掛けとして、東京都内に生成AIの共創施設をオープンしたDNPの和田剛氏と大竹宏之氏に話を聞いた。

[池谷翼, MONOist] (2024年1月11日)



製造業×生成AI インタビュー：

技術文書を100文字要約、アサヒビールがR&Dプロセスに生成AIを導入した2つの狙い

アサヒビールは2023年10月、R&D部門を主な対象として、マイクロソフトの「Azure OpenAI Service」を活用した社内情報検索システムのPoCを開始した。社内情報検索システム導入の理由や、R&Dプロセスにおける生成AI活用の期待感を同社担当者に聞いた。

[池谷翼, MONOist] (2023年11月8日)

製造業×生成AIのトレンドは“現場”にあり——松尾研発のAIスタートアップが語る

© 2024年08月28日 19時09分 公開

[島田拓, ITmedia]



AIポータルメディアを運営するアイスマイリー（東京都渋谷区）は8月28日、AI製品に関する合同記者発表会を開催した。発表会では、東京大学でAIを研究している松尾・岩澤研究室発のAIスタートアップ・EM2（東京都文京区）などが登壇。顧客である製造業界の生成AIトレンドを紹介した。

【訂正履歴：2024年8月29日午後8時 記事掲載当初「松尾研究所発」と記載していましたが、正しくは「松尾・岩澤研究室発」でした。お詫びして訂正します】



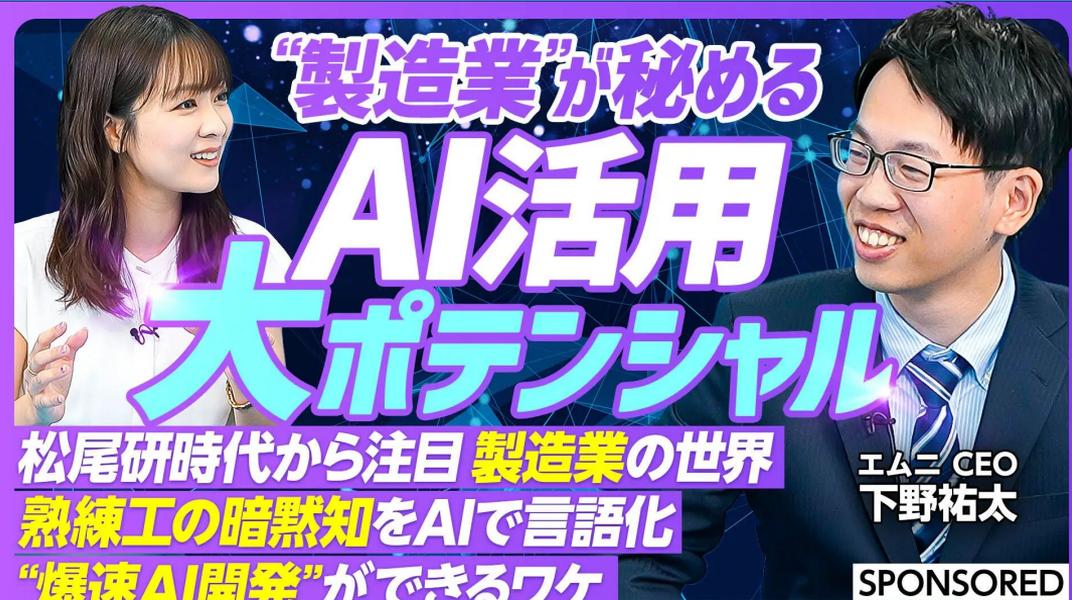
EM2代表取締役の下野祐太さん

日本経済新聞

特集  AI PCとはなんだ!?

人類の可能性を広げる

AI PCで
仕事が変わる!?



“製造業”が秘める
**AI活用
大ポテンシャル**

松尾研時代から注目 製造業の世界
熟練工の暗黙知をAIで言語化
“爆速AI開発”ができるワケ

EM2 CEO
下野祐太

SPONSORED

Forbes^{JAPAN}
UNDER 30
JAPAN 2025



YUTA
SHIMONO

Founder & CEO

 IIM

Forbes^{JAPAN}
UNDER 30
JAPAN 2025

弊社事業



オーダーメイドAI開発を土台としつつAI受託ノウハウを蓄積し、ソリューション及び製造業に特化したマルチプロダクトを展開

	戦略	研究	設計	調達	生技	保全	物流	保守
プロダクト	AI特許 ロケット	-	-	-	AIインタ ビューア	AIインタ ビューア	-	AIチャット ボット
ソリューション	AI特許 検索	AIリサーチ トレンド発 掘	回路図面 の 情報抽出	-	報告書 作成エー ジェント	-	-	-
AI受託 ノウハウ	特許分類	物性値抽出	車両図解析	-	計画最適化	異音検知	-	クレーム 自動対応
	侵害調査	転記自動化	図面解析	-	ヒヤリハット防 止	異常検知	-	

土台となるオーダーメイドAI開発



ユースケース一覧

製造業に特化して現場に根差したAI活用事例を多数有する

ユースケース

製造業		 企画	 設計	 生産	 保守
		 組み立て系 assembly	特許重要度予測	特許重要度予測	検図・転記の自動化
翻訳LLM	翻訳LLM		図面解析	疑似異常生成	
引継ぎAI	引継ぎAI			異音検知	
				生産計画最適化	
 化学系 process	論文情報自動抽出	論文情報自動抽出		AIインタビューアー	チャットボット
	電子実験ノート自動転記	電子実験ノート自動転記		製造業向けチャットボット	
	研究トレンド可視化	研究トレンド可視化		社内ドキュメント検索	

製造業 × AI | 取引先企業



製造業のエンタープライズ企業を中心とした取引実績

※ 取引先(一部)



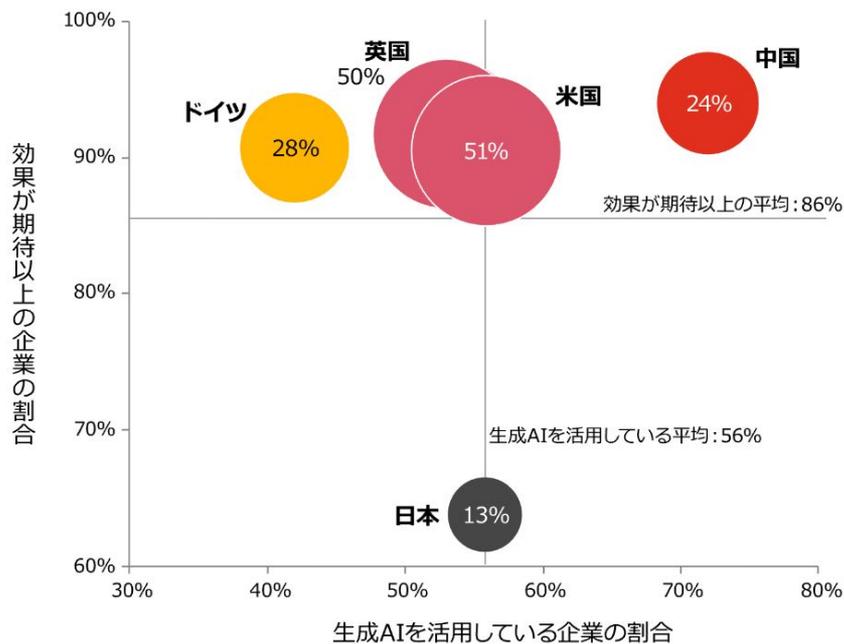
東京都



日米比較から見る AI活用におけるキーポイント

日本の現状 | 他国との比較

他国と比較して生成AI自体利用はしているものの、期待値を大きく下回る



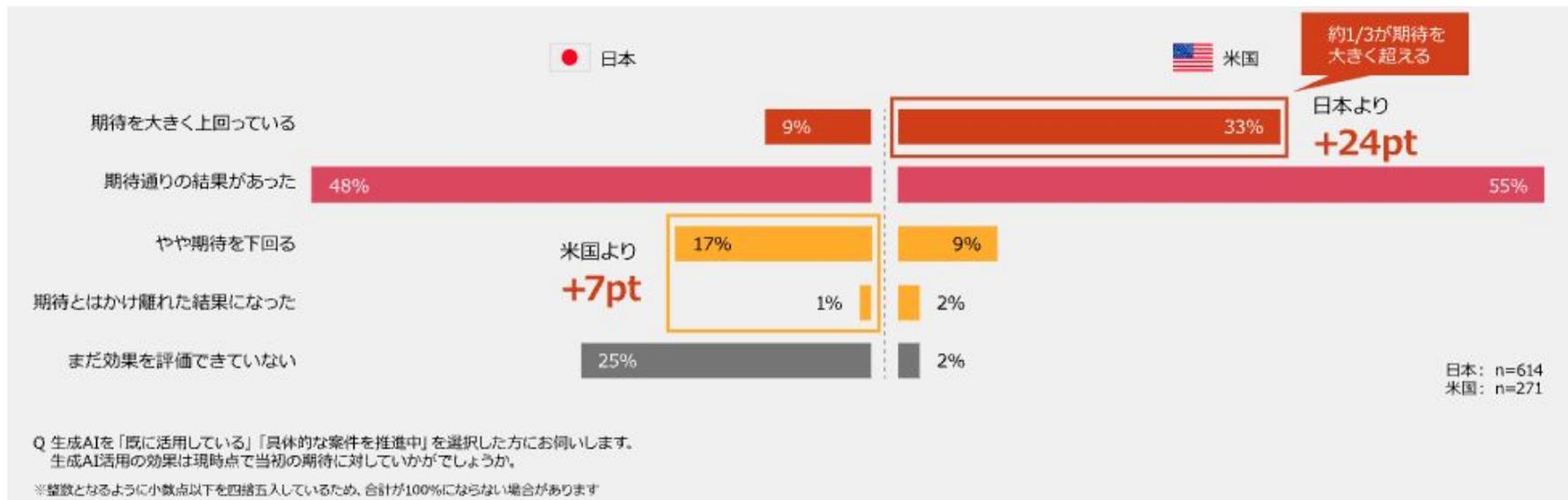
-  **米国**
 - 中国よりも生成AIを活用している企業の割合が低いものの、生成AIの効果が期待以上の割合が同程度に高い
 -  **英国**
 - 「期待を上回る」割合は中国の2倍以上
 -  **中国**
 - 効果が期待以上の企業の割合、生成AIを活用している企業の割合が最も高く、生成AI導入を積極的に推進
 - 「期待を上回る」割合は米・英・独に見劣り
 -  **ドイツ**
 - 他国と比べて生成AIを活用している企業の割合は低いものの、生成AIの効果が期待以上の企業の割合が日米・英・中に見劣りしない水準
 - 「期待を上回る」割合は中国より高く、米・英に次ぐ水準
 -  **日本**
 - 生成AIを活用している企業の割合は平均的な水準にあるものの、生成AIの効果が期待以上の企業の割合は、他国と比べて低い
 - 「期待を上回る」割合は、米・英の1/4、独・中の半分程度
- 効果が期待以上の企業の割合:
生成AIを「既に活用している」を選択した企業の内、生成AIの効果が「期待を大きく上回っている」「期待通りの効果があった」と回答した割合
 - 生成AIを活用している企業の割合:
生成AIの推進度合いとして「社外向けの生成AI活用サービスを提供している」「社内業務等で生成AIを活用している」と回答した割合
 - 円の大きさ:
生成AIを「既に活用している」を選択した企業の内、生成AIの効果が「期待を大きく上回っている」と回答した割合

背景 | 生成AIに関する期待からの差分

日本では米国と比較して生成 AIで期待を超える成果を出せていない

□ 期待との差分

日本は米国と比較して期待を下回るとした回答が7pt程高く、
逆に期待値を大きく超えるとした回答は24pt程低い
→生成AIによる効果を実感できていないのが現状



Q 生成AIを「既に活用している」「具体的な案件を推進中」を選択した方にお伺いします。
生成AI活用の効果は現時点で当初の期待に対していかがでしょうか。

※整数となるように小数点以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります

背景 | なぜ期待値を超えることができていないのか？



ユースケースの設定が最重要にも関わらず、現場ベースでの取り組みができていない

□ 成果を出せた要因

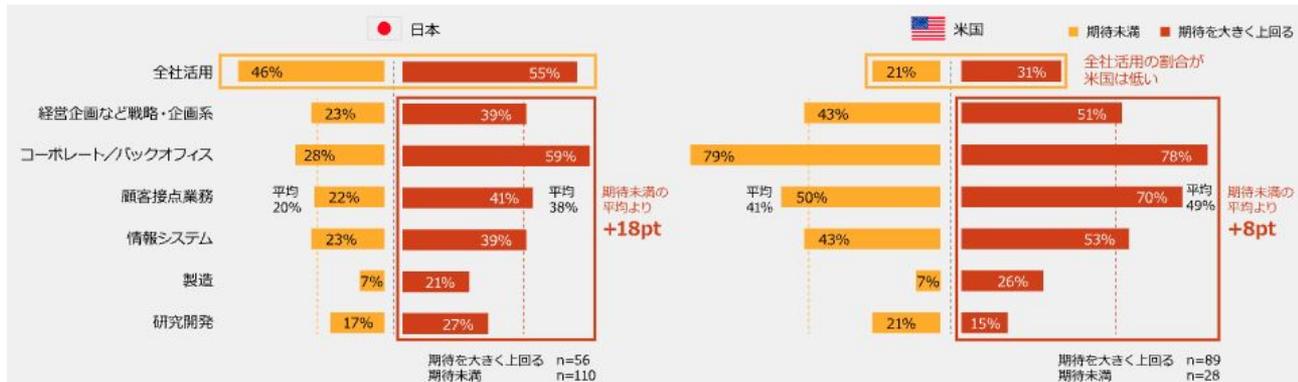
日本・米国共に
最も重要なのは
ユースケース設定
その後データ品質や
環境・利活用フローの
整理が続く



<https://pwc.com/jp/ja/knowledge/thoughtleadership/generative-ai-survey2024-us-comparison.html>

□ 生成AIの使い所

日本では全社活用が多いが、
米国では経営や
コーポレートといった
特定業務に特化した
具体的なユースケース推進が
先行している

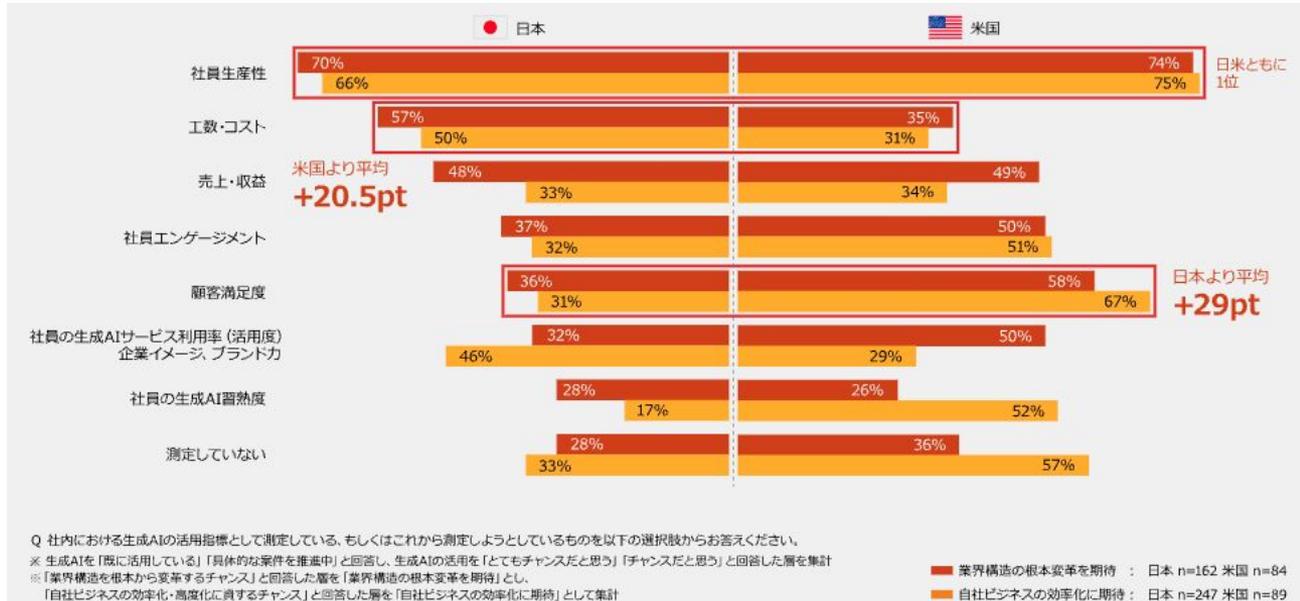


背景 | なぜ期待値を超えることができていないのか？

具体的なユースケースが定まっていないことから業務効率化に終止してしまい、
米国では重要視されている顧客価値向上にアプローチできていないのでは

□ 生成AI活用の指標

日本では工数・コストがより重要視されている傾向、一方米国では顧客満足度をより重要視する傾向が分かる



今後のキーテクノロジー AIエージェントとは

AIに関するトレンドの整理

深層学習による**第3次AIブーム** から**生成AI**による**第4次AIブーム** へ発展

第3次AIブーム <認識・識別系 AI>

第4次AIブーム <生成AI>

Deep Learningの進化・マシンパワー向上・データ量増加を背景に、
画像認識・自然言語処理・制御タスクにおいて人間を超える精度を達成

Deep Learning
画像認識に革新

AlphaGo
トップ棋士に勝利

Transformer
NLPで人間超え

ChatGPT
高精度な文章生成

データ・モデルを大規模にすることで、人間と遜色ないレベルで、ゼロから新しいものを生み出すことまで可能に

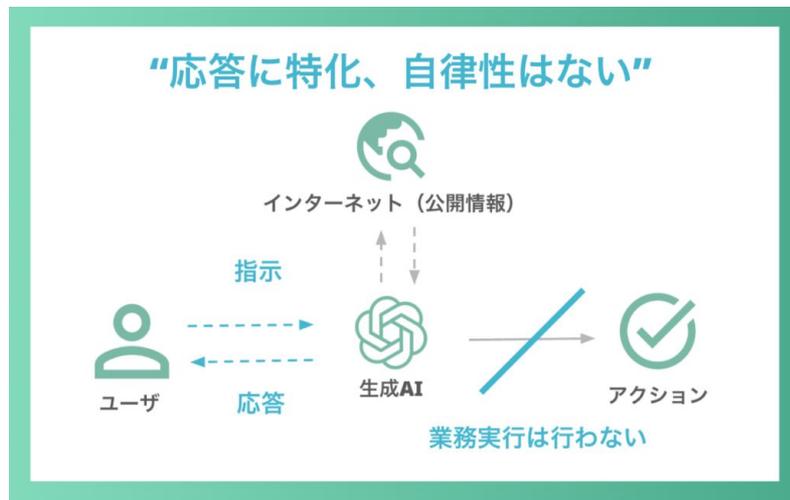
AI Agent
自律的にタスク推敲

AIエージェント | AIエージェントとは

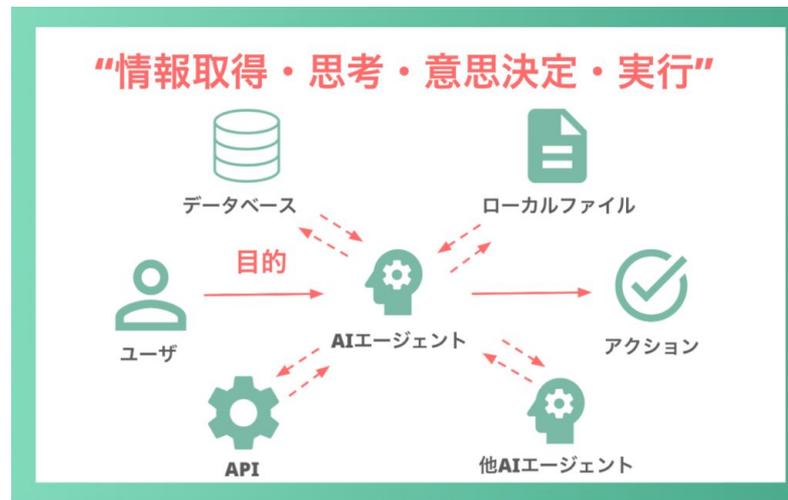
ただ人間からの指示を受けるのではなく、自律的に思考して行動するAI

- 目標達成のために自律的にタスクを遂行する生成AIのこと
 - 単なる生成AIモデルではなく、思考から実行まで行える

ChatGPTに代表される従来の生成AI



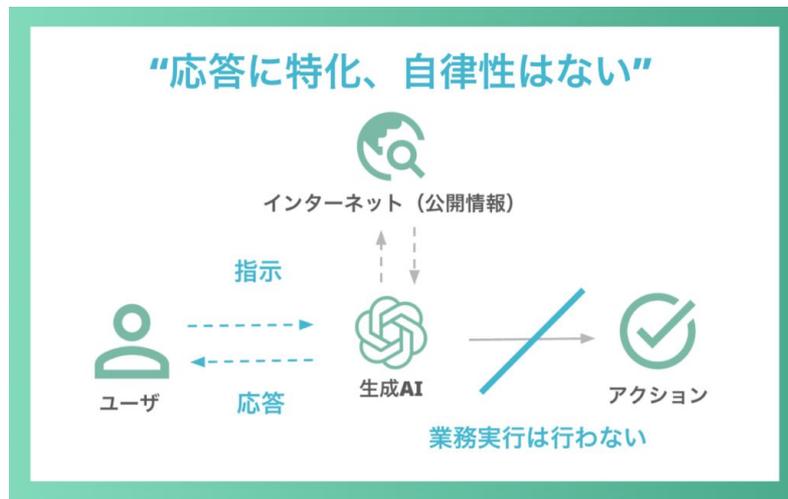
AIエージェント



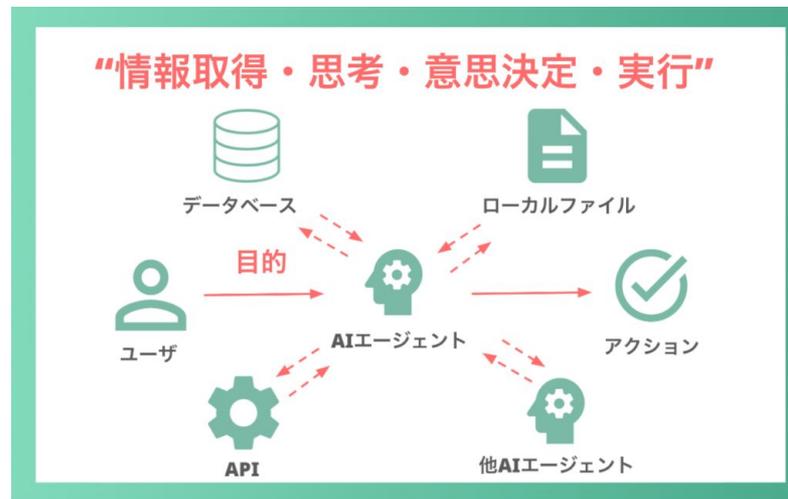
本質は人間とAIで主体者が変わる事

- 目標達成のために自律的にタスクを遂行する生成AIのこと
 - 単なる生成AIモデルではなく、思考から実行まで行える

ChatGPTに代表される従来の生成AI



AIエージェント



[こちら](#)のスライドを利用してご説明

生成AIとAIエージェントの比較・まとめ

比較項目	 生成AI (チャット特化型)	 AIエージェント (自律実行型)
タスクの進め方	受動的 (Q&A中心)	能動的 (自動認識・実行)
システム連携	外部システムアクセス不可	複数システム連携可能
ユーザー作業量	多い (手動実行が必須)	少ない (確認・承認のみ)
フロー特性	分断された対話の繰り返し	一貫した自動化プロセス
主な機能	アドバイス提供	実際の作業実行

主要ポイント

効率性：AIエージェントはエンドツーエンドのタスク完了が可能で、人間の手作業を大幅に削減

制御性：AIエージェントは適切なタイミングでユーザー確認を求め、安全に作業を完了

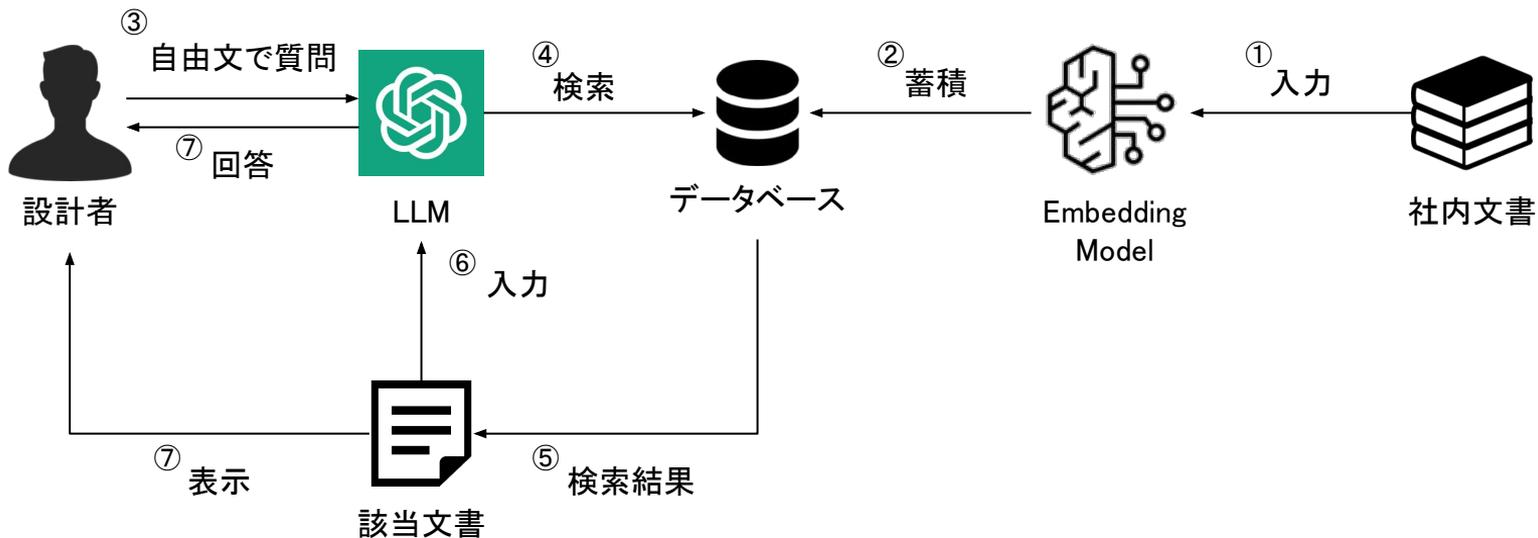
自律性：AIエージェントはタスクを自動認識し、適切なシステムに接続して処理

進化：生成AIからAIエージェントへの移行は、AIの役割が「相談相手」から「実行者」へと変化

AIエージェントの活用を中心とした 製造業における最新事例のご紹介

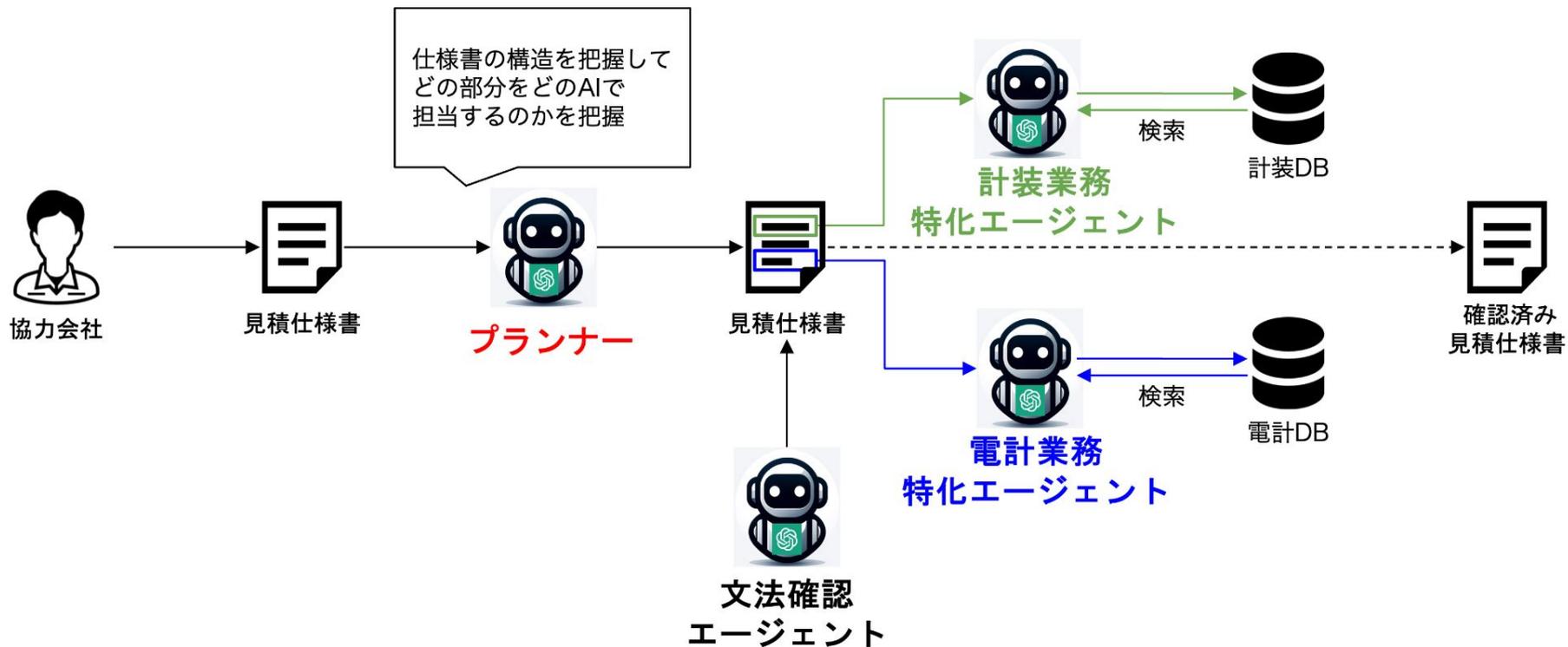
アプローチ | 文書検索システム

社内文書をDB化して自由文での検索を可能にし、設計書作成をサポート



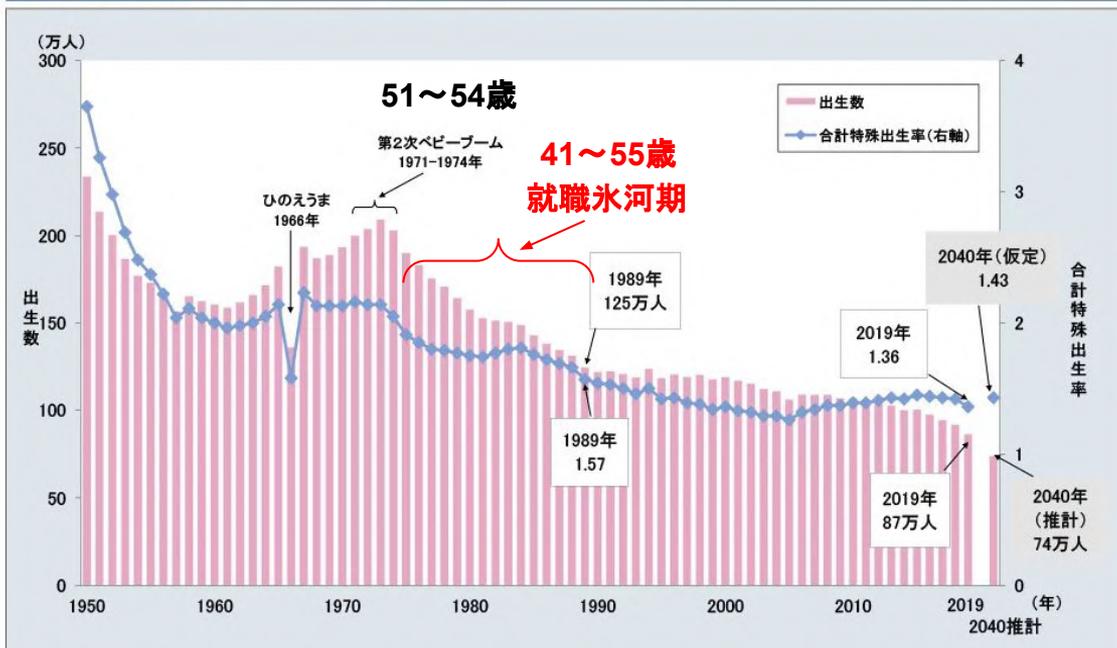
アプローチ | 設計書自動評価

社内文書をDB化して自由文での検索を可能にし、設計書作成をサポート



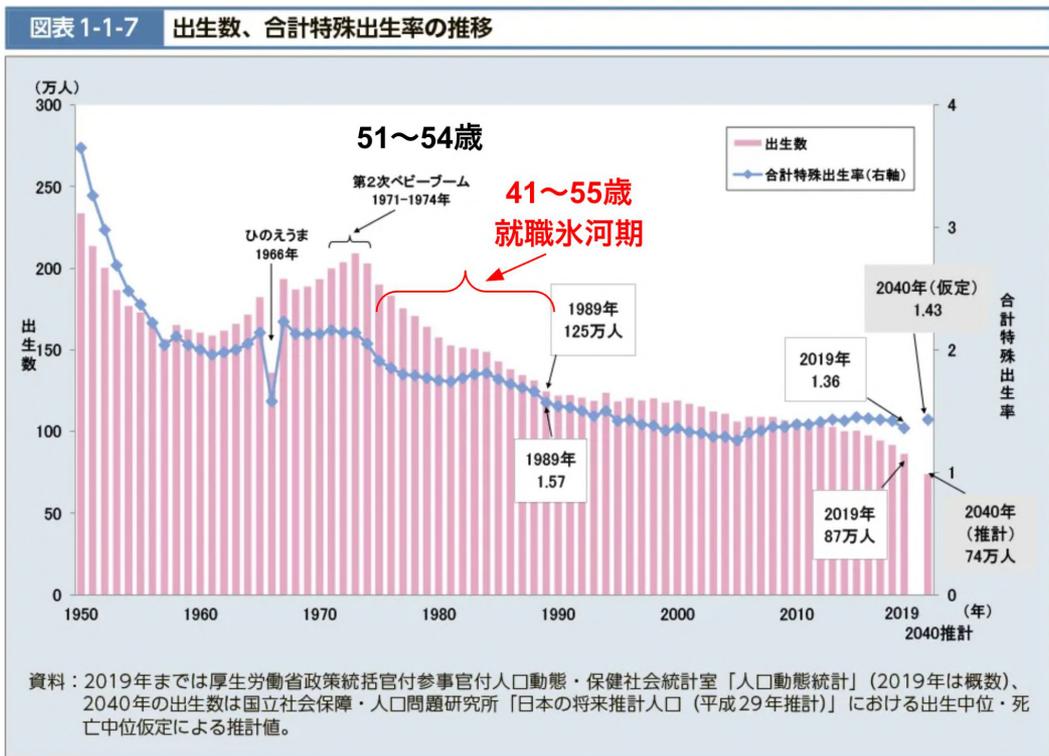
後5~10年後にベテランが一斉に退職し、次を担う次世代の中堅は層が薄い

図表 1-1-7 出生数、合計特殊出生率の推移



資料：2019年までは厚生労働省政策統括官付参事官付人口動態・保健社会統計室「人口動態統計」（2019年は概数）、2040年の出生数は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）」における出生中位・死亡中位仮定による推計値。

今失われゆくノウハウを蓄積しなければ、製造業の競争力の源泉を失いかねない
これは日本の産業全体を中長期的に揺るがしかねないため、製造業に特化



なぜ暗黙知の言語化・技能伝承が難しいのか？

言語化の難しさ・情報共有の煩雑さ・ナレッジ更新の時間的な工数の大きさが要因で、ナレッジを集めて共有し各々の意見を整備して運用することが困難になっている

ナレッジの収集



考えを整理する難しさ

ベテランに「カンコツ」といった暗黙知を自覚してもらい、ナレッジを言語化して網羅的に引き出して整理することは高いスキルが求められ難しい

ナレッジの活用



情報共有の煩雑さ

ナレッジを収集しても、欲しい情報にたどり着けず、上手く活用できていない特に他部署との情報連携はより煩雑になることが多い

ナレッジの整備



整合性が取れない

同じ事象であったとしても、条件や対処方法の違いにより、各ベテランによって意見が異なってしまうため、知識を集約してまとめることが難しい

AIインタビュー

京大発・松尾研発スタートアップ エム二

AIと話すだけで
暗黙知の抽出・技能伝承
が実現できる

属人化防止、教育・
育成コストを削減

暗黙知分析時間
80%削減



AIインタビュアーとは

インタビューで暗黙知を収集し、チャット形式で技能伝承を行うシステム

初期開発



ナレッジの初期作成

作業手順書や保全履歴から
既存の形式知から、
ナレッジグラフを作成

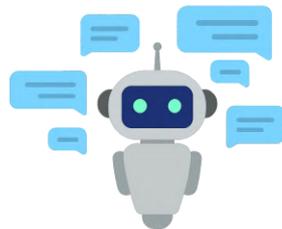
ナレッジの収集



AIインタビュアー

AIインタビュアーの
深掘り質問に回答し、
対話を通して
暗黙知を言語化し
ナレッジグラフに蓄積

ナレッジの活用



AIチャットボット

自由文でチャットボットに
質問することで、
蓄積されたナレッジに
基づいた回答が生成される

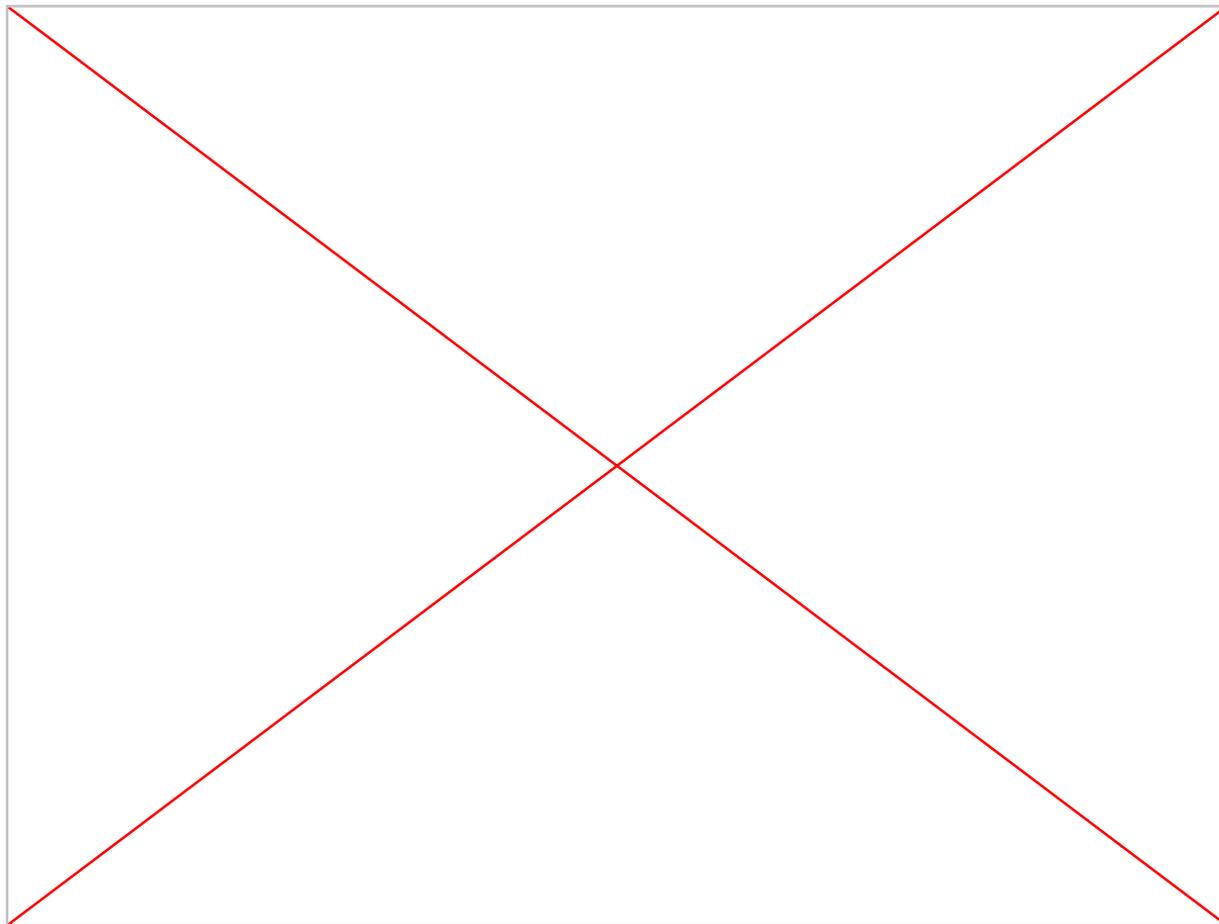
ナレッジの整備



半自動メンテナンス

メンテナンスを開始すると
蓄積されたナレッジを
自動で統合・整理する
最後に人間の確認が必要

AIインタビューー デモ動画



AIインタビュアーのポジション

AIインタビュアー

動画作成ツール

センサーツール

AIチャットボット (RAG製品)

マニュアル作成 支援ツール

暗黙知の
抽出可能性

AIが生成する
深掘り質問に回答して
暗黙知を抽出可能

実際の動作等は
動画で取得できるが
考えまで取得できず、
暗黙知の抽出は難しい

データの取得に加え
整形・分析が必要で、
暗黙知を抽出する
難易度は高い

暗黙知を
抽出することは
できない

ユーザーが自ら
発言内容に暗黙知を
入れる必要があり、
抽出の難易度は高い

情報検索・
取得のスピード

自然文を用いた
チャット形式で
瞬時に検索可能

動画データのため、
検索に多くの時間が
かかってしまう

センサーの分析が
自動化できている場合
は高速に検索可能

自然文を用いた
チャット形式で
瞬時に検索可能

キーワードベースで
情報を見つけるのに
多くの時間がかかる

メンテナンスに
かかる工数

人間の確認を持って
半自動的に
ナレッジを更新可能

メンテナンスは
人間が全て実施する
必要がある

メンテナンスは
人間が全て実施する
必要がある

データ追加は自動化し
メンテナンス工数を
抑えて運用できる

メンテナンスは
人間が全て実施する
必要がある

想定利用シーン

非常業務を含め、
熟練工のノウハウの
収集及び業務活用

言語化が難しい
感覚的な動作を
保存するツール

言語化が難しく、
データ取得が可能な
業務の可視化・分析

暗黙知を必要としない
業務における
情報取得の高速化

所定のフォーマットで
マニュアルを
保存用に作成

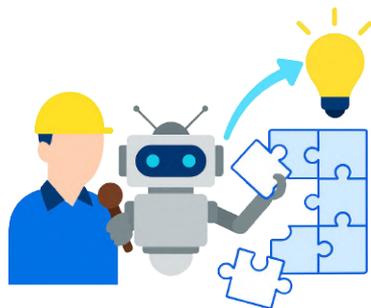
AIインタビュアーの強み

研究開発を通して得られた独自機能により、技能伝承の実現に寄与できる



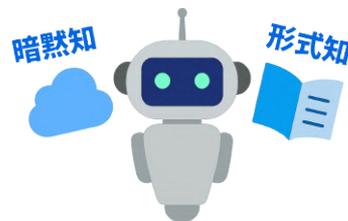
ナレッジグラフの 構造化のしやすさ

品質工学に基づいて、FTA等で利用されるグラフ構造を用いることで網羅的に知識を構造化して整理できる



インタビュアーの 深掘り力

多角的な視点で事象を捉え背景の要因を推定できる
水平思考を応用した独自のインタビューアルゴリズムを研究開発



AIチャットボットの 高精度回答

暗黙知と形式知、2つのデータベースを繰り返し検索することで深い回答を生成する
独自のAIエージェントシステムを開発



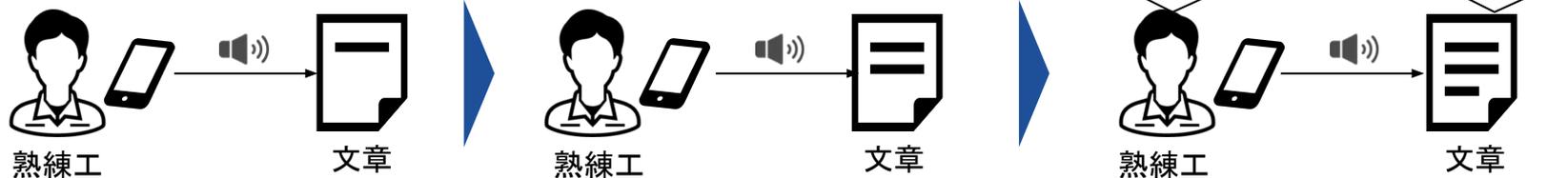
半自動 メンテナンス機能

蓄積されたナレッジを自動で整備更新することで負担を減らして持続的なナレッジ管理を実現できる

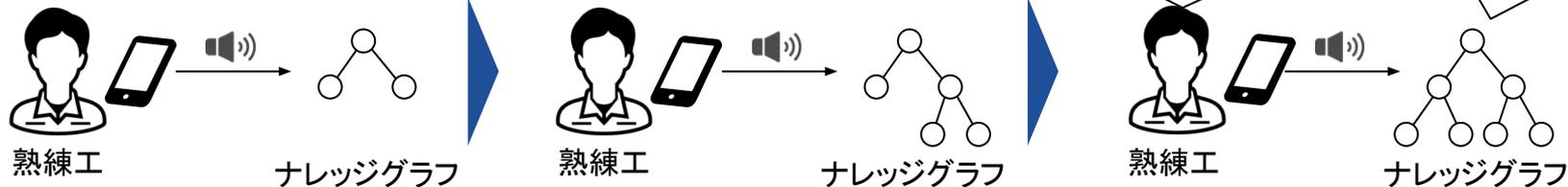
AIインタビュアーの強み | データ形式

ナレッジグラフ形式により、考えを構造化して整理し深掘りが容易になる

文章形式

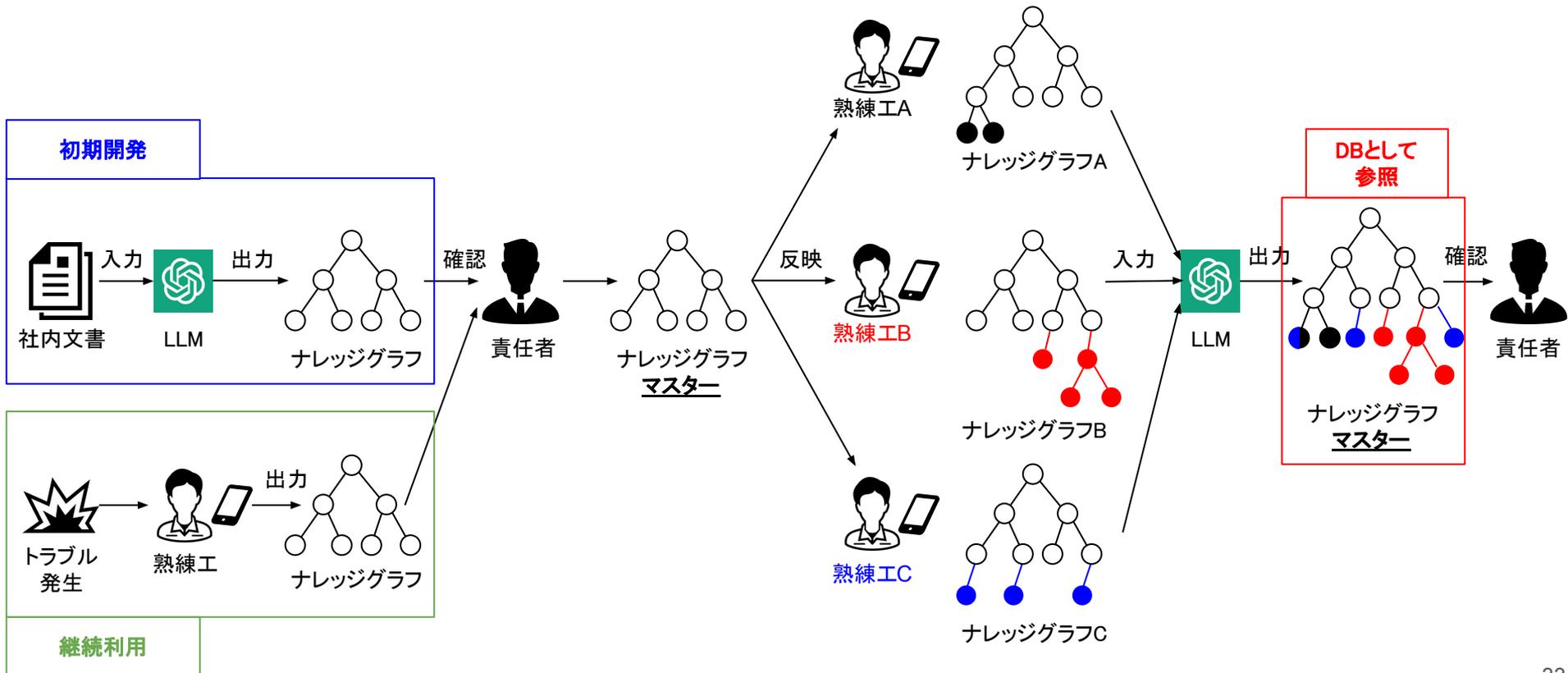


ナレッジグラフ形式



AIインタビュアーの強み | メンテナンス

各ユーザーのナレッジグラフを統合して、責任者が最終確認を実施する



経営戦略に資する知財情報分析・活用の現状

経営戦略における知財情報活用に対して寄せられてる期待は大きいものの、実際にIPランドスケープを始めとする調査・分析は実施できていないのが現状

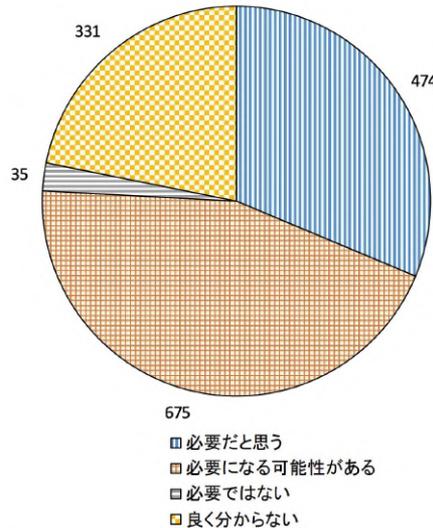


図 2-5 所属組織における IP ランドスケープの必要性

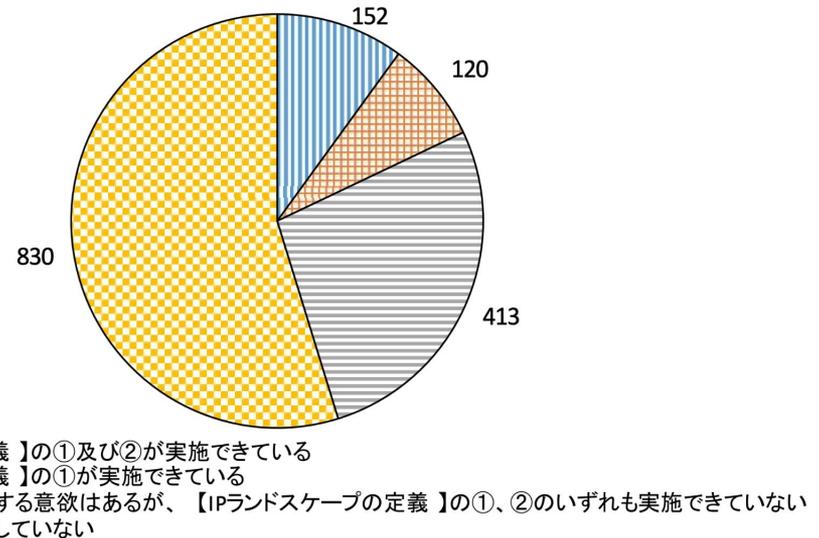


図 2-6 IP ランドスケープの実施状況

経営戦略に資する知財情報分析・活用の課題

分析及び戦略立案に関するスキル不足、リソース不足が主な課題として上げられる

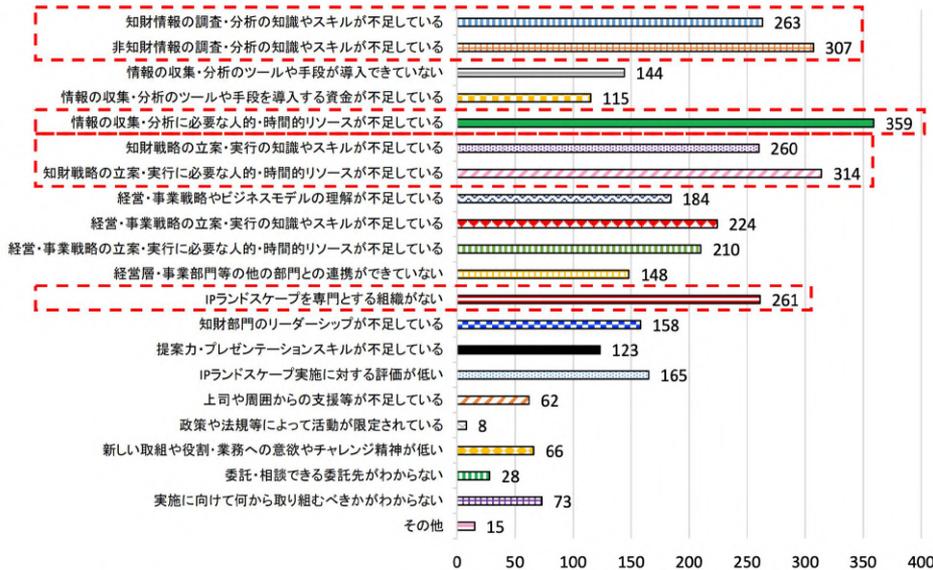


図 2-20 知財部門において IP ランドスケープが十分に実施できていない理由

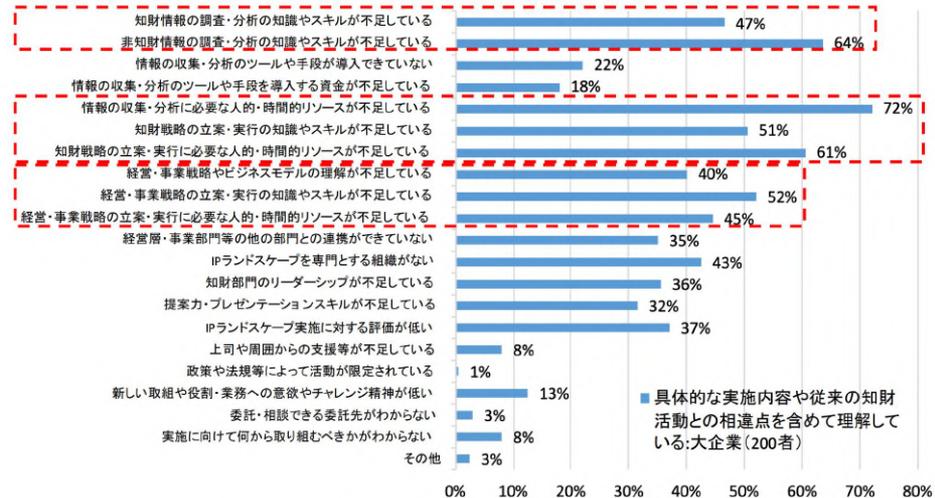


図 2-38-1 大企業における IP ランドスケープが実施できていない理由・課題

課題の整理・深掘り

特許分析にかかる工数が大きく、外注も難しいためリソースが不足してしまう
 また背景情報を考慮せず画一的な分析では、結局個人の高度なスキルが必要になる



分析にかかる膨大な工数

1回の特許調査・分析に対して、
数百～数千件の特許を精査する場合、
数週間～数ヶ月間の期間を要する



外注にかかる多額の費用

BPO等で外注する場合、
数十万円～数百万円程度の
 多額の費用が発生してしまう



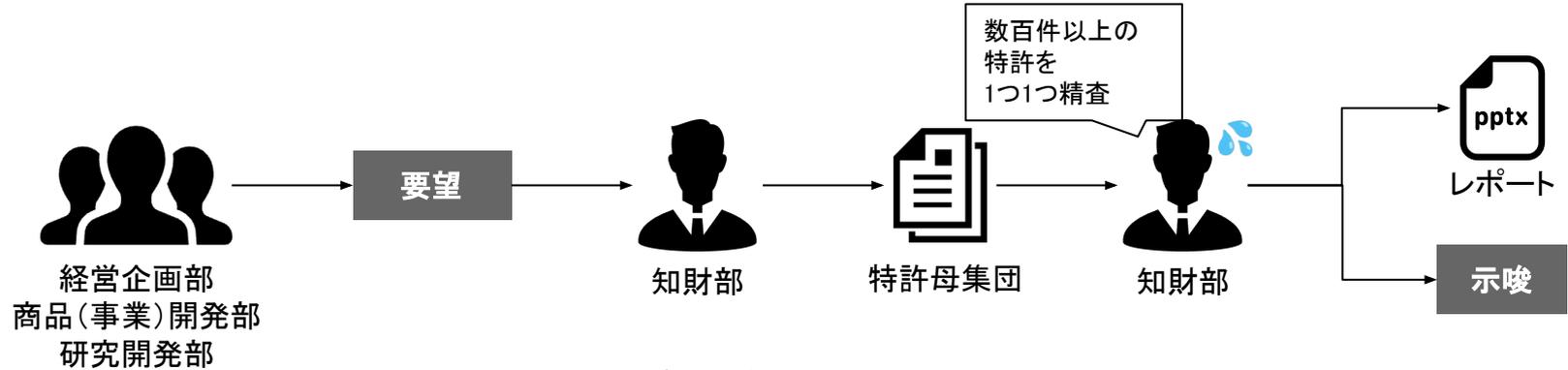
ツールを使いこなす難しさ

背景情報を用いない
 特許分類によるマッピングなど
画一的な分析結果だけでは、
 戦略立案まで実施するためには、
高度なスキルが求められる

AI特許ロケットとは

知財調査の働き方を変え、新たなアイデア・価値を創出するプロダクト

現状



目指す姿



生成AIを活用することで知財経営実施に関する3つの課題を解決することができる

1. 圧倒的なスピード



数百～数千件の特許を生成AIで精読・分析することで、数時間で人間が作成したものと遜色ないレポートを作成可能

2. 業界破壊の低価格



生成AIを活用することで、外注時と比較して最大99.9%のコスト削減を実現

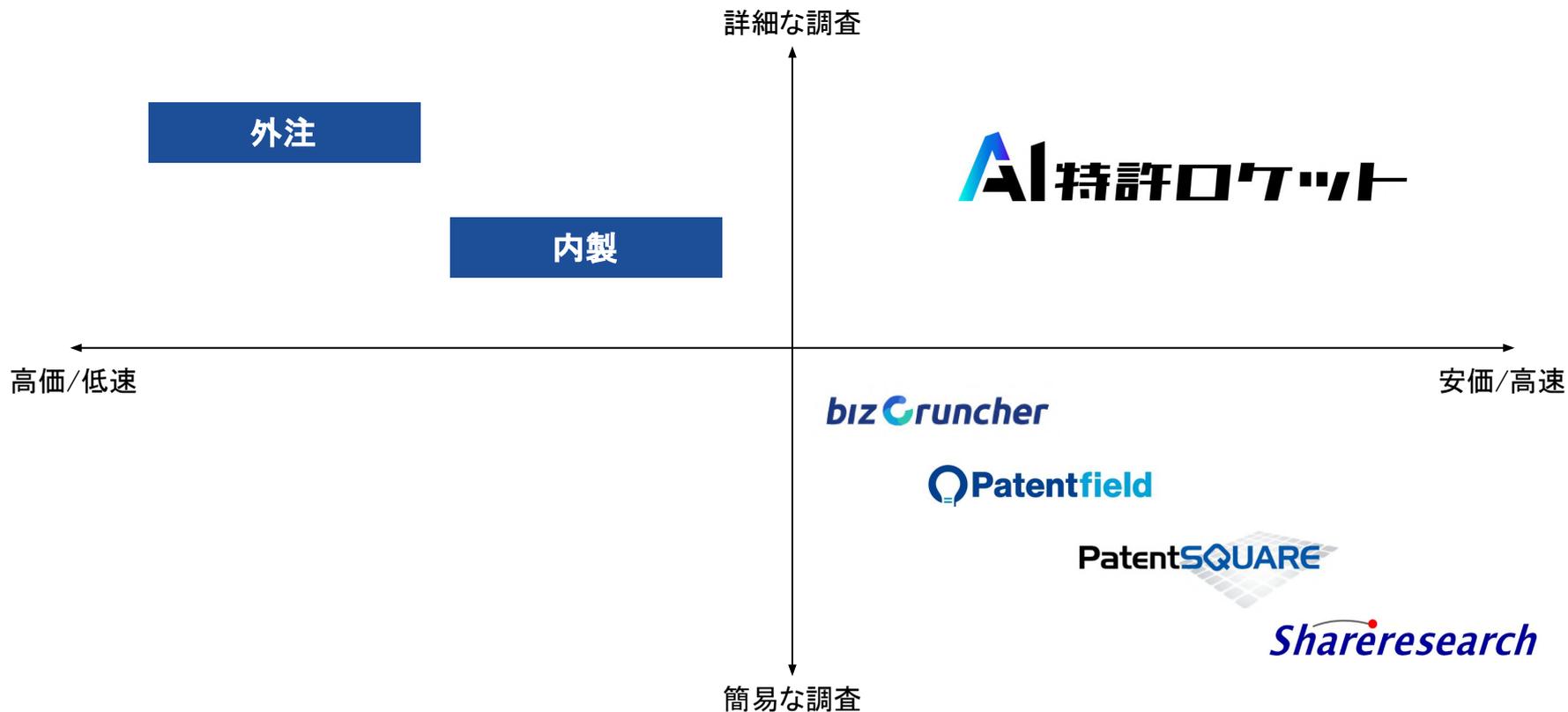
3. スキル不要の簡単分析



AI特許マップを通した可視化に加えて、背景情報に類似する特許情報や他社のトレンドまで示唆出し

AI特許rocketのポジション

AI特許rocketは、人間にしかできなかった自由度で高速かつ安価な調査を実現



AI特許ロケットの強み

独自のアルゴリズムによって実務で利用できるレベルの精度を達成可能

1. 独自の特許分析アルゴリズム



生成AIと**独自のAIアルゴリズム**を組み合わせることで生成AI単体では実現できない詳細な分析を実現

2. 戦略に資する示唆出しアルゴリズム



AI特許マップを分析して、背景情報に対する考察や**潜在リスク**、他社の**トレンド**を出力可能

3. 類似特許抽出アルゴリズム



AI特許マップの出力結果から背景情報に対して**類似性の高い特許**を抽出し、**リスク**まで出力

4. 直感的な操作を可能にするUI

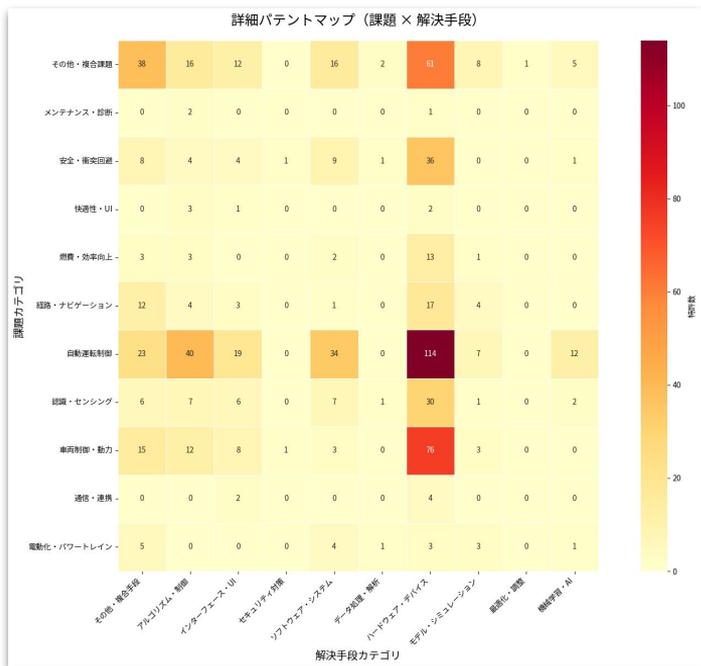


利用可能な機能の**絞り込み**、及びUIの作り込みによって、**ユーザーフレンドリー**な画面を実現

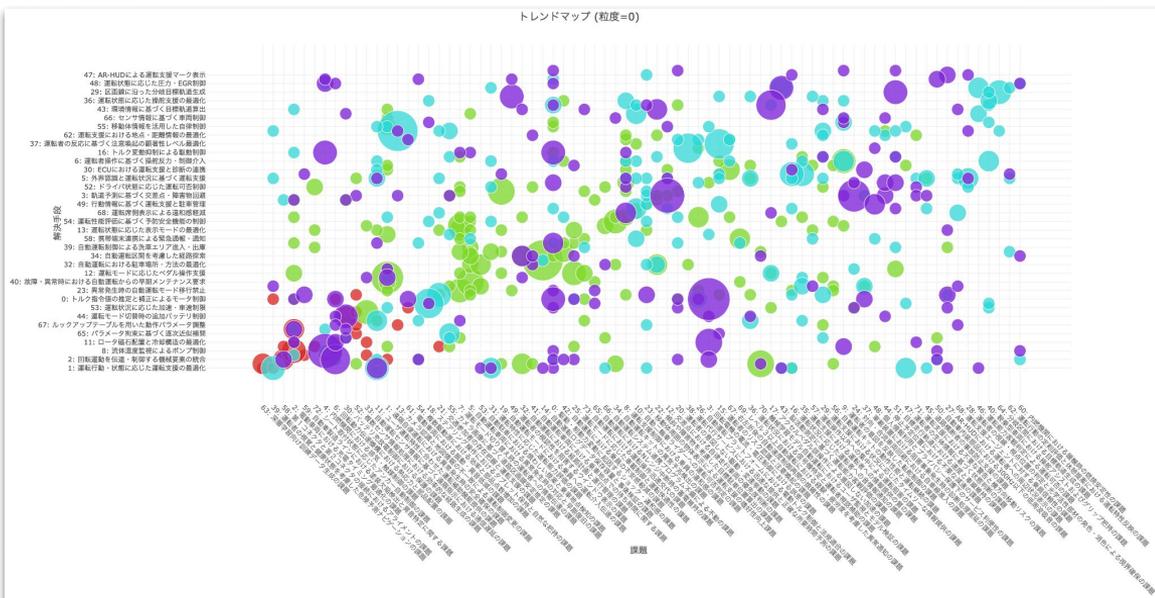
参考) 独自アルゴリズムの優位性

LLMをただ利用するだけでは、細かい粒度の項目を出力できない

生成AIをそのまま用いた場合



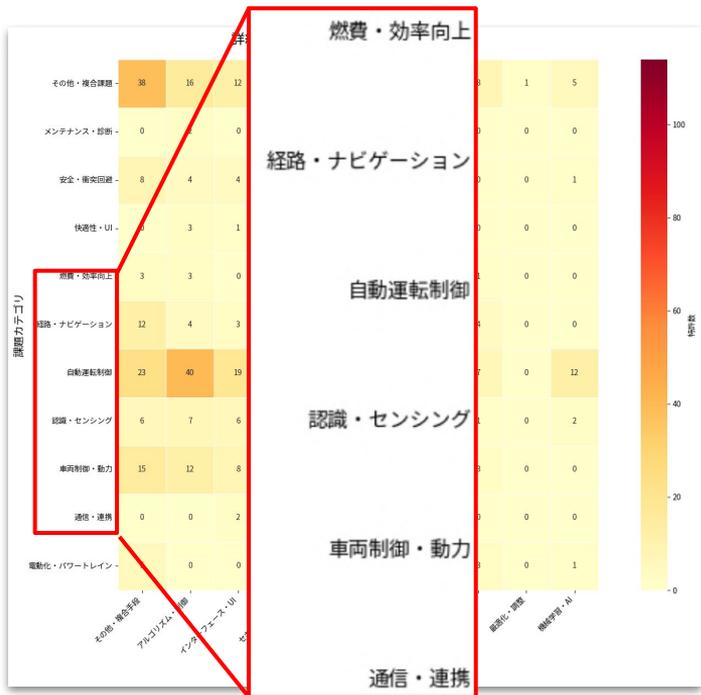
AI特許ロケットを用いた場合



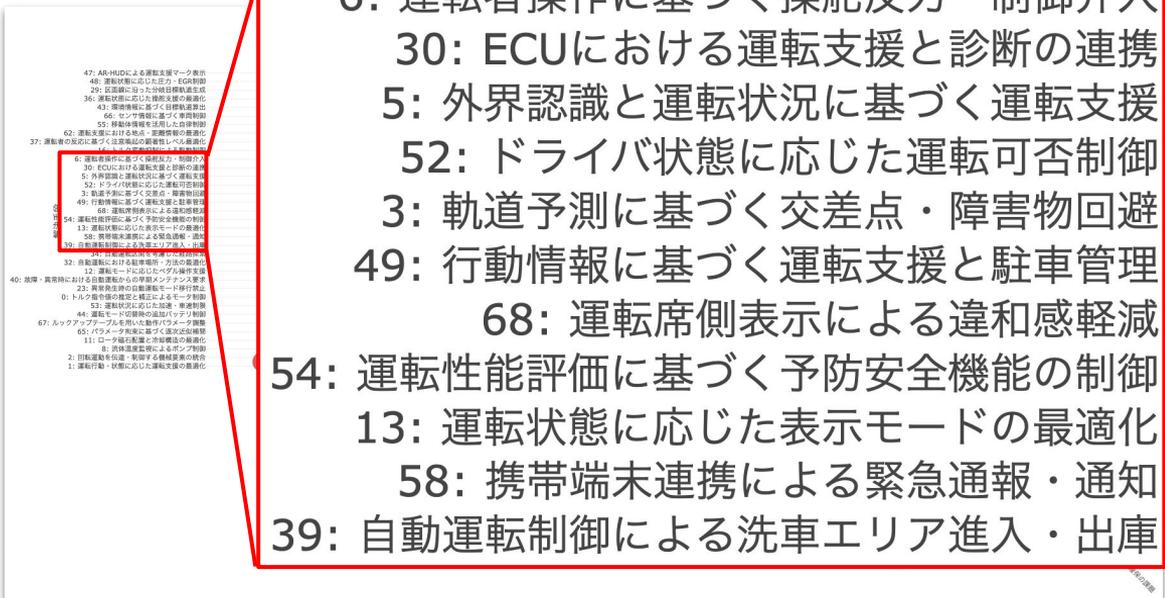
参考) 独自アルゴリズムの優位性

LLMをただ利用するだけでは、細かい粒度の項目を出力できない

生成AIをそのまま用いた場合



AI特許ロケットを用いた場合



AI特許ロケットの提供価値

AI特許ロケットだからこそ『経営に知財を』を実現することができる

1. 特許情報に基づいた 仮説推敲の PDCA高速化



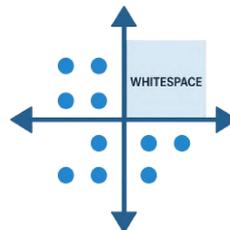
費用・時間を99.9%削減することで、1回のサイクルが高速になり、仮説推敲のPDCAをハイサイクル化

2. グローバルでの 自社ポジションの 明確化



言語によらない海外特許間の比較によって、自社のポジションをグローバルな視点で確認可能

3. 新たな ホワイトスペースの 開拓



背景情報を踏まえた特許分析により、これまで見逃していた新たなホワイトスペースを発見可能

4. 他社の 技術開発状況の トレンド把握



他社の注力領域等のトレンドを把握し、商品開発、戦略立案、研究テーマ探索等に活用可能

AI特許ロケットの提供価値

AI特許ロケットだからこそ『経営に知財を』を実現することができる

1. 特許情報に基づいた 仮説推敲の PDCA高速化



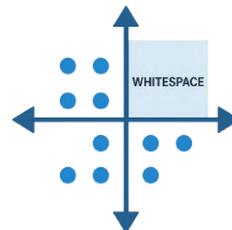
費用・時間を99.9%削減することで、1回のサイクルが高速になり、仮説推敲のPDCAをハイサイクル化

2. グローバルでの 自社ポジションの 明確化



言語によらない海外特許間の比較によって、自社のポジションをグローバルな視点で確認可能

3. 新たな ホワイトスペースの 開拓



背景情報を踏まえた特許分析により、これまで見逃していた新たなホワイトスペースを発見可能

4. 他社の 技術開発状況の トレンド把握



他社の注力領域等のトレンドを把握し、商品開発、戦略立案、研究テーマ探索等に活用可能

PDCA高速化のインパクト

分析・可視化にかかるコストを99.9%削減することで、ハイサイクルで仮説を推敲



時間・費用を最大 **99.9%**削減！



AI特許ロケットのユースケース

知財に基づいた諸々の意思決定をサポートすることができる

自社のポジションの把握

自社の技術が業界全体でリードしているか遅れをとっているか把握する

知財部 経営企画 事業開発

想定競合企業の抽出

注力領域の重複等を踏まえて、競合になりうる企業を抽出する

知財部 経営企画

競合他社の注力領域の把握

競合他社がどの領域に注力しているのかを把握し戦略立案に役立てる

知財部 経営企画 事業開発 研究開発

類似技術の探索＝先行技術調査

検証したいアイデアに類似する特許を調査し、方針策定の材料とする

知財部 事業開発 研究開発

有望なホワイトスペースの特定

他社がまだ開拓していない「攻め所」となる技術領域を特定する

知財部 経営企画 事業開発 研究開発

技術トレンドの把握及び今後の予測

現状の技術トレンド及び予測を把握することで、方針策定の材料とする

知財部 経営企画 事業開発 研究開発

パートナー企業の抽出

知的財産上パートナーとなるM&A候補先や協業先を抽出する

知財部 経営企画

技術シーズの発掘

今後の研究方針を決める上で考慮すべき技術シーズを発掘する

知財部 研究開発

終わりに

適切なユースケースの設定 × AIエージェントの活用が 製造業を中心に今後のAI開発において重要になると考える

□ AI活用におけるキーポイント

- 日本は他国と比較して、生成 AI で期待値を超えることができていない
- その主たる原因は、ユースケースの設定ができていないことが挙げられる

□ AIエージェントとは

- 今後のAI活用を占うキーテクノロジーである AI エージェントの本質は主体者が変わることに
- AI エージェントによって、本質的に AI 中心の業務フローの実現に近づく

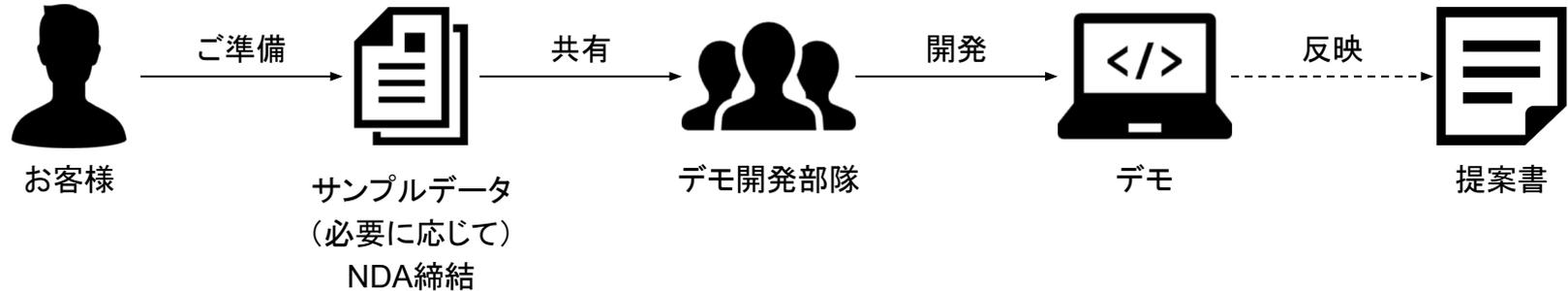
□ 製造業における最新事例

- 設計書作成業務をサポートする AI システム開発のロードマップでご紹介の通り、まずは RAG 開発を行い、その後 AI エージェントに発展させる流れが多い
- 製造業の主要課題である暗黙知の言語化・技能伝承に対して、AI 技術の活用が進む
- グローバル活用が可能なユースケースとして、特許領域における AI 活用も進んでいる

無料爆速デモ開発

無料でデモを爆速開発し、AI活用を検討する上での不確実性を低減

□ デモの流れ



□ 取り組み例

紙芝居ではなく、実際の動作イメージや精度が分かるようなデモシステムを開発可能

- **1日で高速デモ開発**
論文サンプルを頂いた翌日に、調査効率化 AIのデモシステムをご説明
- **1週間で複雑な要件を整理・プロトタイプまで開発**
100ページに及ぶサンプル資料を確認し、要件整理から実際に動くシステムまで構築

爆速無料デモ開発実施中！
お問い合わせは以下より



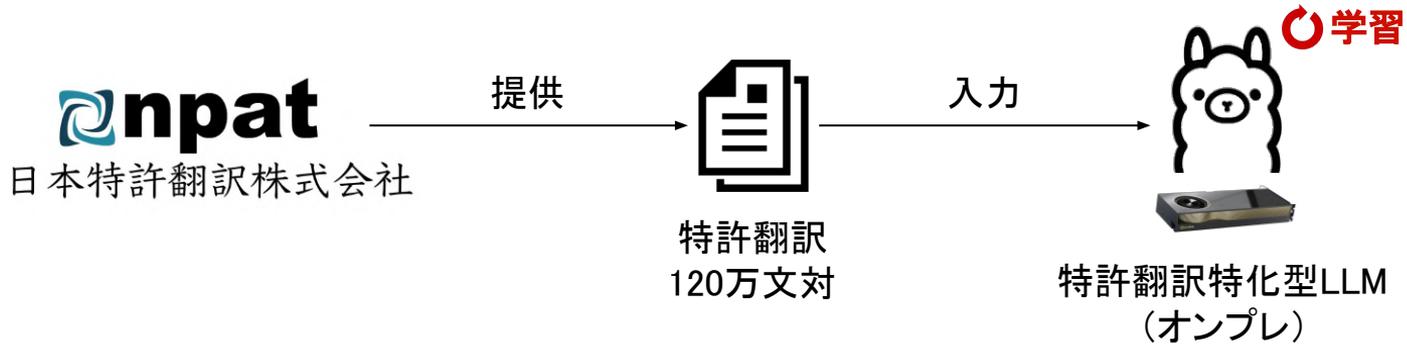
Thank you .



事例2 | 独自翻訳LLMのオンプレ開発

特許翻訳に特化したLLMをオンプレ上で独自開発し調査を効率化
特許翻訳特化型LLMを用いることで、外国公報を1つ数十円で調査可能に

事前学習

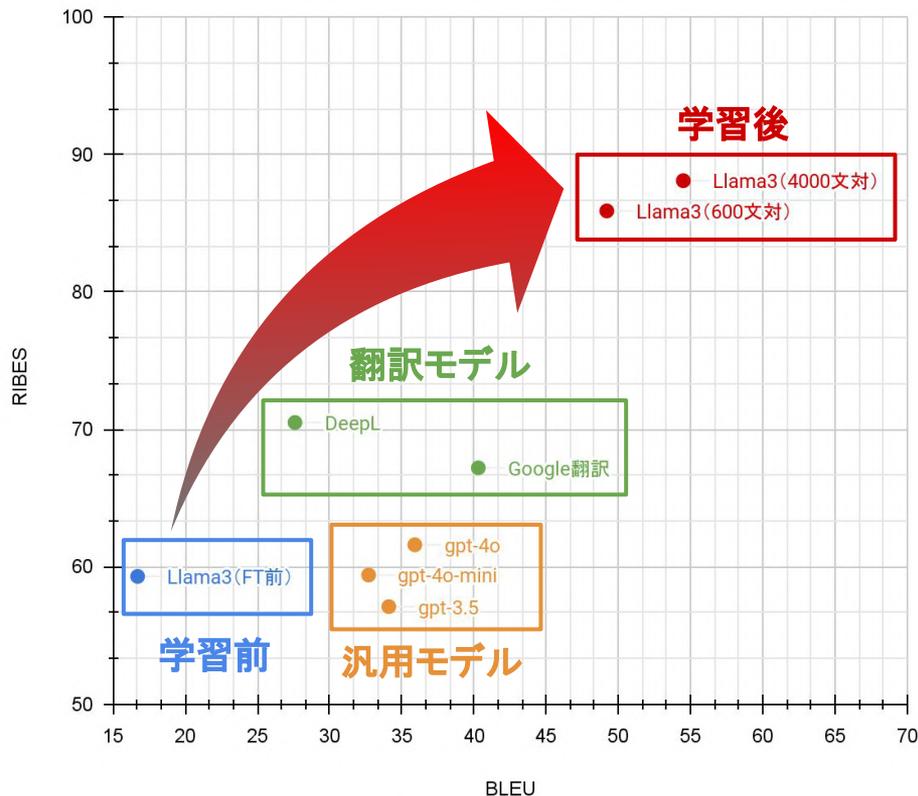


実運用



事例2 | 独自翻訳LLMのオンプレ開発

ファインチューニングを実施することで、特許翻訳性能が大幅に向上

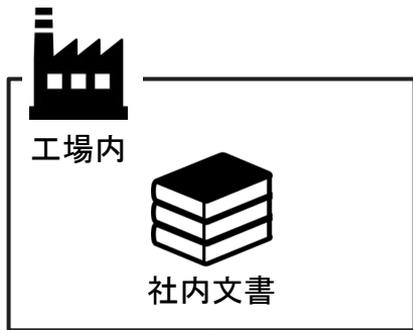


事例2 | オンプレでのLLM運用が持つポテンシャル

クラウドを利用することなく工場内の閉じた環境で生成AIを利用することが可能に

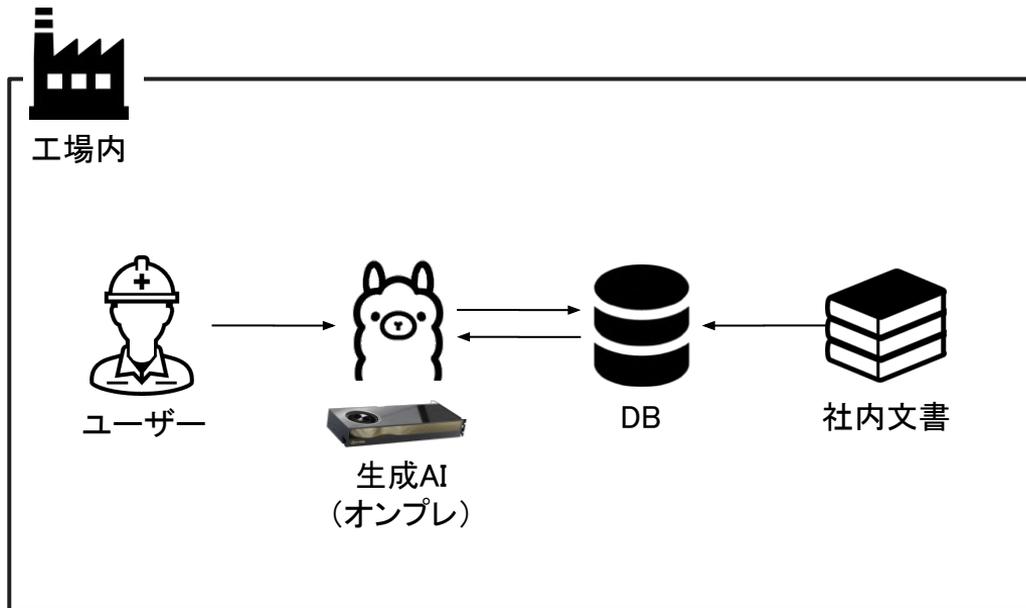
課題

工場内ではクラウドを利用できない



実現できること

オンプレ環境で開発することで、工場内完結で生成AIが利用可能



gpt-o4-miniと同等精度のモデルがオープンソースとして公開 クローズドな環境におけるLLM活用のゲームチェンジャーになり得る

□ 精度の高さ

- 右図のように高い性能を示している
- またFine-tuning等の特化学習が現実的に可能

□ モデルの安定性・安心感

- これまでよく利用していたLLMと基本同じ
※ Copilotも中身は同じ
- 日本語も安定して出力でき、
思想の偏りも中華系LLMより少ない

□ モデルのコンパクトさ

- gpt-oss 20Bであれば
数十万円程度の消費者向けPCで動作可能
- 120Bも大規模なシステムは不要

Humanity's Last Exam
Expert-level questions across subjects

